

神道（天理教）の霊祭「五十日祭」の行い方

<招く側のためのマニュアル>

2024年11月作成

仏式における法要にあたるものを神式では「霊祭」（「霊前祭」ともいいます）です。死後の日数に伴って、霊祭の名称が変わっていきます。葬儀の翌日に行う霊祭は「翌日祭」、その後は死後10日ごとに、十日祭、二十日祭、三十日祭、四十日祭、五十日祭と続きます。

五十日祭では「献饌（けんせん）」や「祭詞奏上（さいしそうじょう）」、「玉串奉奠（たまぐしほうてん）」、「直会（なおらい）」などを行いますが、さらに「清祓いの儀」と「合祀祭」を併せて行うことが多くなっています。

玉串については、天理教としてはなしでも良くなりました。

五十日祭のあとは、百日祭、一年目の祥月命日に一年祭を行います。亡くなって1年後以降に行う霊祭のことを特に式年祭といいます。三年祭、五年祭、十年祭、二十年祭、三十年祭、五十年祭といった「式年祭」が続きます。

天理教では、神道と違い所属教会にて、春と秋に御霊祭を行います。その際に教会への合祀も行います。また、年祭については各家庭に祭られている御霊様に対して行います。

今回は特に五十日祭の準備と行い方についてまとめました。

1. 五十日祭の準備

霊祭当日に実施される主な儀式は、「献饌」（けんせん）、「祭詞奏上」（さいしそうじょう）、礼拝です。さらに、現在は、霊璽（れいじ）を御霊舎（みたまや、仏式の仏壇にあたる）にうつして祀る「合祀祭」（ごうしさい）も併せて行うことがほとんどです。その後、仏式のお斎（会食）にあたる直会（なおらい）があります。

「納骨」については、本来、神式では葬場祭当日に土葬、または火葬後に骨上げをして納骨をしていました。しかし現在は、仏式の四十九日のように一度自宅に遺骨を戻して「五十日祭」に「埋葬祭」を行って納骨するのが一般的です。また、亡くなってから1年目の「一年祭」に納骨するケースもあります。

1-1. 参列者への案内

参列者の都合を考え、最近は亡くなってから50日目より前の土日に行います。五十日祭は家族、親族、友人などで行うことが多いようです。人数が多い場合は霊祭の案内状を送ります。直会や返礼品の手配に必要なので、返信用のハガキを同封した上で、霊祭実施予定日の1か月前には相手の手元に届くように送ります。出欠の返事は2週間ほど前に届くように返信の締め切り日を設定します。招く人数が少ない場合には電話で連絡してもかまいません。

案内状の主な内容〔文例〕

<p>なお霊祭後別席にて粗餐を差し上げたたく存じます お手数ではございますが○月○日までに○○にてご都合をお知らせ下さい</p>	<p>日時 令和○○年○○月○○日（ ） 午前○時○分より 場所 ○○にて 住所 □□県△△市○○○ 電話</p> <p>平成○○年△月</p> <p>(施主住所) (施主電話) (施主名前)</p>	<p>謹啓 ○○の候 ご一同様にはご清祥のことと存じます このたび 亡○○○の五十日霊祭と埋葬祭をいたしたたく存じます つきましては左記のとおり相営みたく存じますのでご多忙中誠に恐縮ではございますが ご参列賜りますようお願い申し上げます</p> <p>記</p> <p>謹言</p>
--	--	---

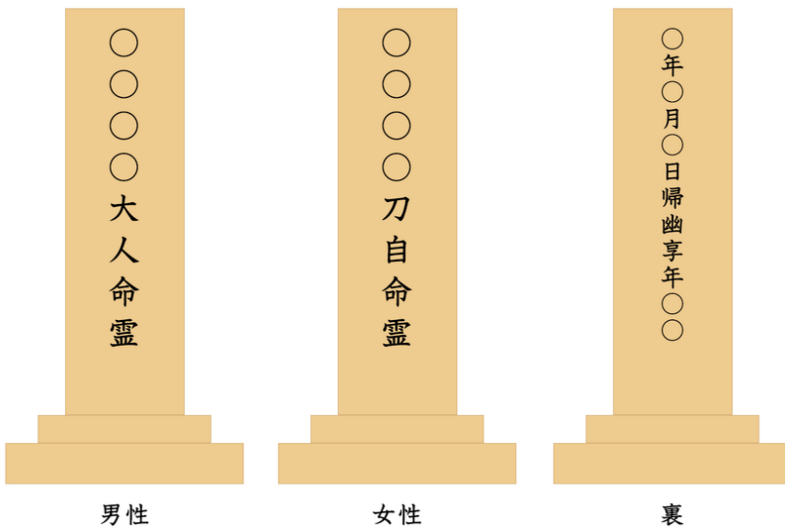
1-2. 事前に準備するもの

霊祭の準備は大きく分けて、祭壇に供えるもの、教会長へ渡すもの、参列者に渡すものの三つがあります。

霊璽（れいじ、御霊代）

仏式の位牌にあたり、御霊遷しの時に教会が準備します。表側に名前、裏側に亡くなった年月日と年齢を記します。氏名の下に「命(みこと)」の号をつけた「〇〇〇〇命」という霊号が多く、「命」の前に、男性の場合「大人(うし)」、女性の場合「刀自(とじ)」をつけ「〇〇〇〇大人命」「〇〇〇〇刀自命」とする場合があります。子供の場合「彦」「姫」をつけることもあります。

天理教では、お通夜における御霊遷しの際にすでに用意し荒魂様としてお社に納めています



御霊舎（みたまや）（祖霊舎、それいしゃ）

仏式の仏壇にあたります。御霊舎の中には霊璽を祀ります。新しい御霊舎を買う場合には五十日祭までに準備することになっています。

五十日祭までのお社は、教会で用意したものを使います。

もしまだ御霊舎がない場合は五十日祭までに用意します。教会に相談して下さい。

すでに御霊様をお祭りしている場合は、そこに合祀します。

供え物 五十日祭までは荒魂様に用意します。

教会から用意した祭壇に九皿。会長に相談して準備します。



〔例 月次祭のお供え 一番上 お米・御神酒・お魚

2段目、根菜、根菜、葉野菜 3段目 お菓子、果物、果物など、お菓子など)

酒、米、水、魚、野菜〔根菜、葉野菜、実野菜など〕、果実、餅〔小餅〕、菓子など。

後で参列者で分けられるよう、菓子などは個別包装のものが便利でしょう。

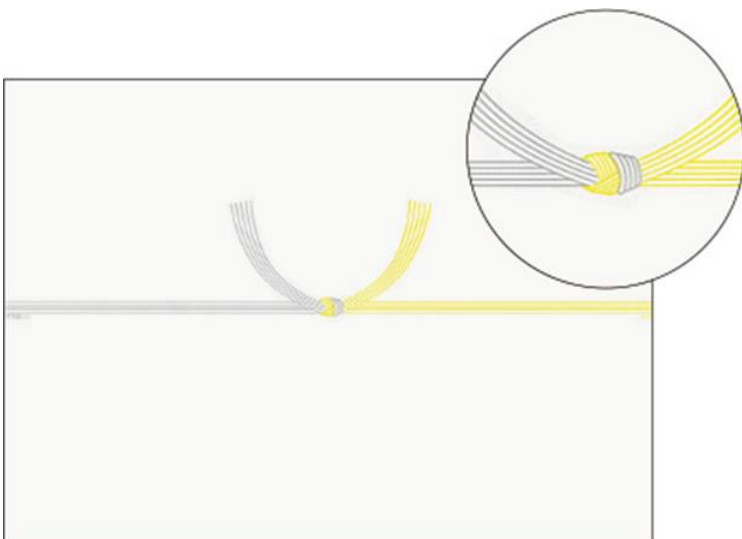
五十日祭などでは、箱で個別包装のものをお供えする事が多いです。

掛け紙：蓮の花が印刷されていない掛け紙、のしなし

表書き：「御供」「奉献」「奉納」

表書きの下に施主のフルネームを書きます。

水引：西日本は黄白結び切り。



直会（なおらい）の手配

返礼品

もともと仏式の「香典返し」の習慣はありませんでしたが、仏式の法要の影響で返礼品を贈るようになりました。参列者は「玉串料」として1人5,000円～10,000円程度を持参しますので、この玉串料に対して、返礼品（1世帯に一個）を後日送るか、当日渡すかどちらかの方法でお返しします。返礼品は仏式の香典返しの品物と同じで、合計2,000円～5,000円程度のタオルやお茶、海苔やお菓子、カタログギフトなどです。

なお、玉串料を戴かない場合は、事前にご案内しておきます。

掛け紙：蓮の花が印刷されていない掛け紙、のしなし

表書き：「偲び草」「志」など。

表書きの下に〇〇家またはフルネームを書きます。

水引：東日本は黒白結び切り、西日本は黄白結び切り



教会へのお礼

金額の目安：3～5万円〔教会へのお礼は1万円～〕

白無地封筒（のしなし・水引なし）

表書き：「御礼」「お礼」「御玉串料」

表書きの下に施主の〇〇家またはフルネームを書きます。

白封筒はのり付けします。

御車料

田中花子

お車代

1万円～をお包みします。

白無地封筒（のしなし・水引なし）

表書き：「御車代」

表書きの下に施主の〇〇家またはフルネームを書きます。

のり付けします。

御膳料

1万円～をお包みします。表書きは「御膳料」とするのが一般的です。

白無地封筒（のしなし・水引なし）

表書き：「御膳料」

表書きの下に施主の〇〇家またはフルネームを書きます。

のり付けします。

2. 五十日祭の服装

基本的には仏教の場合と同じ喪服。ただし、法被着用であれば地味な普段着でも良い。法被は、天理教における略礼服に当たります

3. 五十日祭の儀式と作法、礼拝のしかた

「霊祭」では、以下のような儀式を行います。

献饌

荒魂様に用意しておいたお供えを行います。

教会の方でお手伝いしますので、お供えものを用意しておいて下さい

祭詞奏上

神職が祝詞（のりと）を奏上します。祝詞とは神職が神前で唱える言葉です。神職のお祓いを受ける時、祭詞奉上（さいしほうじょう）の時はできるだけ深いおじぎをします。

玉串奉奠と拝礼

霊祭では神職の進行によって献饌や祭詞奏上、礼拝などを行いますが、玉串奉奠は仏式の焼香にあたります。昨年より天理教では玉串奉獻は特にしなくてもいいことになりました。礼拝は原則、正座で行いますが、足腰の不自由な方、正座の苦手な方は、イスをご利用いただいたり、イスがない場合は、足を伸ばしたりして礼拝されても構いません。



参拝のしかた

①

両手をついて一拝する

②

頭を上げて4回手をたたく



③

両手をついて礼拝する

このとき、お願いごとやお礼などを申し上げる



④

頭を上げて4回手をたたく

⑤

両手をついて一拝する

1. 両手をついて一拝します。
2. 頭をあげ四拍手し、両手をついて礼拝します。
3. 日々のお礼やお願いごとなどを申し上げます。
4. 礼拝が終わったら四拍手します。
5. 両手をついて一拝します。

合祀祭（ごうしさい）

それまで仮霊舎（かりたまや）に祀ってあった故人の霊璽（れいじ）を御霊舎（みたまや、仏式の仏壇にあたる）にうつして祖先の霊と一緒に祀ります。

埋葬祭（納骨式）

埋葬祭とは仏式の納骨式のことです。天理教では亡くなった人の魂は霊璽（れいじ）に、遺骨はお墓に納めます。神道では本来、火葬した日に納骨（法的には「焼骨の埋蔵」）をしていましたが、現在は火葬後一度遺骨を自宅に迎え、五十日祭（または百日祭や一年祭）と合わせて納骨、埋葬祭をすることが多くなっています。

埋葬祭には、遺骨、遺影、供物（神饌・簡単なもので良い）、供花、などを用意します。また、墓地に納骨する手続きとして火葬許可証と認め印などが必要です。

事前に、名標などに名前を入れる際に、墓地の使用許可証、火葬証明の確認が行われます。また、墓地の使用者の名義については、別途変更が必要なことがあります。

式は墓前に教会長を招いて執り行います。墓前に神饌や榊、供花をお供えします。お墓の納骨室（カロート）を開け（必要があれば石材店の方にお墓を開けてもらう）、遺骨を納めた後に会長がお祓いと祝詞の奏上を行います。そして参列者一同が拝礼を行います。

直会（なおらい）

直会とはお供え物をいただく儀式です。祭典が終わったら最後に神饌（しんせん）と呼ばれるお供え物を参列した者でいただくのですが、これには神霊との結びつきが強くなり、力を分けてもらえるという意味があるのです。

以前はその場で調理し戴いていましたが、今ではお下がりとして持って帰っていただきます。お供え物は、持ち帰ることも考えて菓子などは日持ちのする個別包装のものがいいでしょう。

以上、五十日祭について、覚え書きとしてまとめました。参考になれば幸いです。

2024年11月記す 会長拝